

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01314

研究課題名（和文）オランダ別段風説書の研究

研究課題名（英文）Research on "Oranda Betsudan Fusetsugaki" (The Dutch Special News Reports to Japan)

研究代表者

岩田 みゆき (iwata, miyuki)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40365010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアヘン戦争を契機としてオランダ船が日本にもたらした海外情報である「別段風説書」について検討した。研究の目的は、1)「別段風説書」の内容の精査、2)日本国内の写本や情報伝播の動向を明らかにすることである。具体的には、写本の所在調査、写本の成立・伝来等に関する史料学的研究、「別段風説書」の内容の検討と索引の作成を行った。また「別段風説書」の成立から終焉の過程、江戸訳・長崎訳などの翻訳上の問題、情報の伝達・漏洩・深化の実態などについて幕府・諸藩・在地社会の相互関係を意識しつつ明らかにした。さらに西洋史の側から「別段風説書」の世界史的意義を位置付けることを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「別段風説書」は全国各所に写本として伝来しているが、いまだに所在状況の全貌は明らかではない。またその成立と終焉、翻訳上の問題、情報漏洩の実態、情報の活用などについても不明な点が多い。本研究では写本の所在調査を継続するとともに、情報内容・関連史料の詳細な分析を行い、江戸訳・長崎訳などの翻訳作業の実態、幕府・諸藩・在地社会の動向、大槻磐溪・箕作阮甫・塩谷宕陰などの「別段風説書」と深く関わりをもつ人物や著作の研究などを通じて、それらの諸問題について、新たな事実を具体的に明らかにした。また「別段風説書」の内容を西洋史研究者が分析し、世界史的視座から「別段風説書」の意義を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the "Betsudan Fusetsugaki", which was overseas information brought to Japan by Dutch ships in the wake of the Opium War. The objectives of the study are: 1) to examine the contents of the "Betsudan Fusetsugaki"; and 2) to clarify the trends of manuscripts and information distribution in Japan. Specific research included a survey of the location of manuscripts, historiographical research on the establishment and transmission of manuscripts, and a study of the contents and the preparation of an index. We then clarified the process from the establishment to the demise, translation problems in the Edo and Nagasaki translations, the transmission, leakage and deepening of information, while being aware of the interrelationships between the shogunate, clans and local communities. Furthermore, the project aimed to position the world-historical significance of the "Betsudan Fusetsugaki" from the perspective of European history.

研究分野：日本近世史

キーワード：オランダ別段風説書 別段風説書 海外情報 アヘン戦争 ペリー来航予告情報 日本近世史

1. 研究開始当初の背景

「鎖国」制下の江戸時代において、幕府は、オランダ船が入港することに定期的にもたらず風説書によって恒常的に海外情報を入手していたが、天保年間に起きたアヘン戦争を契機として、従来の風説書とは別に、より詳細な海外情報をもたらされることになった。これを「別段風説書」と呼び、天保11年から安政4年までの18年間、海外情報の中でもっとも体系的に世界情勢を伝え、幕末期対外関係が多事多難となる中、幕府の政治・外交の判断材料として重視された情報であった。「別段風説書」の存在と幕府の外交政策上での重要性は、既に1970年代から幕末政治史・情報史・対外交渉史などの研究者の間で注目されてきており、近年では松方冬子氏らによって研究が進められてきた。その後2019年には応募者が代表を務める青山学院大学総合研究所プロジェクトの研究成果として『オランダ別段風説書集成』(吉川弘文館2019年)が出版され、「別段風説書」の全貌が通覧出来るようになり、研究条件が格段に上がった。しかしながら、いまだに研究のスタート地点にいとわざるをえず、まだ全国に多数残されているはずの写本の所在調査と史料研究が必要である。また、「別段風説書」の成立と成立後の変遷及びその終焉、幕府による海外情報の独占と情報漏洩の実態、幕府・諸藩・在地社会の相互の関わり、情報の内容と幕府政策に与えた影響、翻訳上の問題など、既に議論はあるものの、いまだに不明な点が多く、課題が残されている。また、日本史研究者だけでなく、外国史研究者によって、世界史的視野から「別段風説書」を評価することも不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、『オランダ別段風説書集成』の研究成果の上にたち、アヘン戦争以降の18年間にわたり、江戸幕府が恒常的に入手した詳細で確かな海外情報である「別段風説書」の写本の継続調査、内容の詳細な検討と索引の作成、および幕府から諸藩、ひいては在地社会にまで伝播する実態とその影響を、幕府・諸藩・在地社会の三つのレベルで検討し、その相互の人間関係を意識しつつ、江戸時代における海外情報の国内における伝播の実態と、それが近世日本に与えた影響について明らかにする。また外国史研究者を加えることによって、世界史的視座に基づく新しい日本の近世史像を描いていくことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、(1)風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』(吉川弘文館2019年)史料篇の活用と収集した写本の史料学的研究、(2)幕府・諸藩・在地社会における「別段風説書」の研究、(3)ヨーロッパ世界からみた「別段風説書」の研究、の三部門で構成した。

(1)について、『オランダ別段風説書集成』史料篇に掲載されている「別段風説書」の内容を精査するとともに、国名・人名・事項名などの索引の作成を進めた。また、まだ全国に多く残されている写本を継続して調査・収集する。収集した写本の比較を行い、特に長崎訳と江戸訳の違いについて検討した。併せて、写本および写本を収録している叢書類、史料群について、その成立・伝来の過程などについての史料学的研究を行った。以上の作業は(2)と同時に進めていった。(2)では、「別段風説書」の国内における成立過程および、幕府・諸藩・在地社会への伝達・漏洩・深化の実態と、それぞれにおける情報収集・分析・活用の実態と影響について研究を行った。ここでは、まず「別段風説書」の国内(長崎・江戸)における翻訳手続きや伝達ルート、長崎訳と江戸訳との違い、「通常の」風説書との違いについて明らかにすることにした。また、情報の伝達・漏洩・深化の実態と影響について、幕府・諸藩・在地社会それぞれについて明らかにした。

具体的には、幕閣老中・幕臣・諸侯・諸藩士・学者・民衆などが残した「別段風説書」を始めとする海外情報、「風説留」などを調査・検討し、その内容、伝達・収集ルート、分析・活用の実態、与えた影響などを明らかにし、かつ情報を収集し発信した人物についても注目した。特に民衆レベルにまでどのように海外情報が伝わり、彼らの意識にどのような影響を与えたのか、情報の深化の問題にまで広げ、幕府・諸藩・民衆の相互関係に注目していった。(3)では、ヨーロッパ世界からみた「別段風説書」では、「別段風説書」の内容が、どの程度の正確さでヨーロッパ情勢を伝えたのかなど、情報源や翻訳の問題も含めて、ヨーロッパ世界から「別段風説書」を位置づけていった。

以上の三つの部門について調査・研究を行い、成果報告の場として研究会を11回、外部研究者を招いた特別研究会を1回、最終年には講演会・シンポジウムを1回開催した。

4. 研究成果

以下(1)(2)(3)の部門ごとに主な研究成果を報告する。

(1)については、以下のとおりである。

風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』(吉川弘文館2019年)史料篇を精読し、天保11年から嘉永元年までの9年間の索引を、国名・地名・人名・事項名・官職名などごとに分類して作成した。嘉永2年から安政4年までについては今後の課題とした。

『オランダ別段風説書集成』に収録されていない新たな写本及び関連史料の発掘・調査を行い、実績を上げた。研究代表者岩田みゆきは、長崎歴史文化博物館・諏訪神社所蔵[諏訪文庫]の現地調査を行うとともに、国立国会図書館憲政資料室所蔵[石室秘稿]や東北大学附属図書館[狩野文庫](マイクロフィルム版)の点検作業を行い関連史料を調査した。研究分担者岩下哲典は、庄内藩農民清川八郎関連文書・土浦市立博物館所蔵阿部正弘関連文書の調査、及び静岡県藤枝市松岡神社所蔵松岡萬関係史料の調査を行った。嶋村元宏は、横浜開港資料館寄託[中嶋宏子家所蔵文書]、武雄市歴史資料館[武雄鍋島洋学関係資料]、東北大学附属図書館[狩野文庫]、関西大学図書館[増田涉文庫]、神戸大学附属図書館社会学系図書館[住吉文庫]、弘前市立博物館[津軽家文書]、宇和島伊達文化保存会[宇和島伊達家文書]を調査し、「別段風説書」とそれに関連する一連の史料を新たに発見した。研究協力者佐藤隆一は、江川文庫、市立米沢図書館[水野家文書]、北海道大学附属図書館北方史料室所蔵[力石雑記][力石勝之助関係文書]の調査を行った。松本英治は、長崎歴史文化博物館・九州大学附属図書館付設記録資料館、佐賀県立図書館、久留米市立中央図書館、真田宝物館、宮内庁書陵部・国立国会図書館・東京大学総合図書館・東京大学史料編纂所などの調査を行い、関連資料を収集した。白石広子は、東京大学史料編纂所所蔵[オランダ国立文書館所蔵日本商館文書]マイクロフィルムから、オランダ語原文の調査を行った。

(2)については、(1)に記載した史料調査に基づき、各自のテーマに従って史料を分析し研究した。研究代表者岩田は、「在地社会における「別段風説書」というテーマのもとに、主として長崎を中心に調査・研究を行った。長崎では、京系割符宿老巨智部忠陽の、長崎在勤中の日記・記録である『要録』を検討し、海外情報の収集と交流関係の一端を明らかにした。巨智部忠陽の記録した海外情報の中に、直接「別段風説書」は見当たらなかったが、通常の風説書については、その都度記録され、京都の系割符会所に送られていた。このことから、通常の風説書は系割符商人の間では比較的簡単に入手し、書写することができた一方で、別段風説書は通常の風説書とは異なった扱いであり、系割符商人たちも入手困難な情報であったことが窺える。しかし、巨智部忠陽たち系割符宿老の長崎における交流関係を見ると、長崎奉行所関係者・長崎町年寄・乙名・五カ所宿老などの貿易業務にともなう付き合いを始めとして、「別段風説書」の翻訳を直接行っ

たオランダ通詞榎林栄三郎、長崎町年寄を通して極秘に書写し、藩に「別段風説書」を伝えた薩摩藩の長崎閩役奥四郎、「別段風説書」を収集記録していた国学者中島広足など、「別段風説書」と密接に関わりのある人物たちとの交流が確認できた。従って幕府が極秘としていた「別段風説書」も、巨智部忠陽の身近なところで書写されていた事実が確認でき、記録はされていないものの、糸割符宿老たちがその内容を知る機会は十分にあったと考えられる。また、長崎と京都町会所との頻繁な書状のやりとりから、長崎で得た情報はすぐに京都に通達されていることも明らかとなった。以上のほか、土浦の町人学者色川三中が収集した情報記録『草能片葉』・『書翰集』（静嘉堂文庫所蔵）、色川三中と関わり深い豪農大久保家の情報記録を検討し、色川三中へ「別段風説書」関係情報を提供した人物、三中が情報を提供した人物について再検討し、在地社会へと情報が伝わっていく道筋の一端を明らかにした。

研究分担者岩下哲典は、嘉永五年の別段風説書・バタヴィア総督公文書・日蘭通商条約の一連のペリー来航予告情報について総括し、これらの情報が政治運動に利用された事例を報告し、嘉永五年の「別段風説書」が幕末政治史上に与えた影響の大きさを改めて強調した。また出羽庄内藩農民出身の清河八郎の書状の分析から、ペリー来航予告情報を始めとして恒常的にオランダ風説書からの情報に接していたこと、老中阿部正弘から土浦藩主土寅直宛の書状の分析を通じて、当時最高機密情報に接していた政治家の政治思想を「開明」か「攘夷」かの二項対立で理解することへの限界性を指摘した。また、静岡県藤枝市松岡神社の尊攘派旗本松岡萬関係史料の分析を行い、松岡萬と津山藩蘭学者で後に蕃書調所教授となった箕作阮甫との関係について考察し、松岡萬による黒船来航関係史料の中に、箕作阮甫から提供された海外情報の記載がみられることから、箕作阮甫が、島津斉彬や佐賀藩、古河藩家老鷹見泉石などに情報提供していたことに加えて、旗本にまで情報漏洩に関与していた事例を紹介した。

研究分担者嶋村元宏は、仙台藩儒者大槻磐溪によるペリー来航前後の情報収集活動の実態と、その活用について明らかにした。嶋村氏は既に、大槻磐溪によってまとめられた嘉永七年の第二回ペリー来航時に収集した情報をもとに作成された『金海奇海』について、そこに含まれる画像の原本入手・伝播について考察し、昌平坂学問所関係者による情報ネットワークの存在を明らかにしているが、ここでは、大槻磐溪による対外問題に関する意見書・上申書類を分析し、どのような著作物から海外知識を得ていたのかを『大槻文庫書目』を参照することによって確認した。また、大槻磐溪が朱註を施した嘉永五年ペリー来航予告情報に関する一連の文書の受取りの可否に関する関連文書を編纂した『和蘭告密書御受取始末』（宮城県図書館所蔵）を分析し、その成立時期や流布について考察し、『和米始末』（静嘉堂文庫所蔵）から、昌平坂学問所関係者のネットワークの存在を確認した。ついで、『米夷紀事』（国立国会図書館所蔵）の分析から、ペリー第二回来航前後の実地見聞と、情報源となった人物や当時流布した「風説」について確認し、情報の活用について検討した。また「別段風説書」の内容を分析し、「別段風説書」がオランダによって取捨選択され、作為的に作成された情報、すなわちオランダが創り出した「世界」を日本に提示したものと位置付け、そこで語られた「静謐」と「騒擾」の記述を確認し、それを幕府がどのように受けとめ、どう対応しようとしたのかについて考えた。

研究協力者佐藤隆一は、アヘン戦争に関わる史料集『阿芙蓉彙聞』を編纂した儒者塩谷宕陰に注目し、アヘン戦争情報に精通した宕陰が、天保15年オランダ国王開国の勸告に対する意見書として提出した『通商利害論』の内容と性格を詳細に検討した。現在この種の意見書は残存数が少なく、貴重な成果をあげた。

研究協力者松本英治は、「別段風説書」の取り扱いと翻訳作業について、長崎訳と江戸訳に分けて詳細に分析した。まず長崎訳について、別段風説書の提出から翻訳までのプロセスを確認し、

ついで翻訳作業について、かかった日数や取扱状況について年次ごとに具体的に検討した。また、翻訳作業終了後、の清書と草稿の取り扱いについて、その特徴について考察し、清書された長崎訳の江戸への送付まで、具体的に検討した。江戸訳の開始時期についてははっきりしていなかったが、江戸訳写本が存在していない天保11年から弘化3年の間に、江戸の天文方において作成されたアヘン戦争関連諸条約翻訳本である『和睦約定』（宮内庁書陵部所蔵）を長崎訳と比較検討し、アヘン戦争関連情報の部分的な江戸訳に匹敵することから、弘化3年までは江戸訳は必要がなかった可能性があること、また弘化4年の江戸訳について、『大日本維新史料』に掲載されている江戸訳全文について、出典に不明な点があるものの、箕作阮甫による「覚」との比較検討から、「別段風説書」の存在は弘化四年からであることを改めて明らかにした。ついで、各年の江戸訳の作成状況を明らかにした。また、長崎訳と江戸訳で校合作業が行われた点について、その意図と作業について、阿部家資料・石室秘稿をもとに考察した。さらに、江戸訳を確認できない嘉永6年から安政3年までの期間についての諸事情や、安政4年の江戸訳についてもその特徴を考察するなど、新たな事実を明らかにした。

(3)については、研究分担者割田聖史が担当した。割田氏は、ヨーロッパ史の立場から、「別段風説書」の内容を検討し、日本に伝えられてきたヨーロッパに関する情報を分析した。「別段風説書」の中にヨーロッパ情報が現れるのは1847年からであり、「別段風説書」が終わる1857年の間は、ヨーロッパ史の中では「資本の時代」の始まりの時期にあたり、「別段風説書」にもその特徴が良く表れていること指摘し、19世紀の世界史の動向の中に位置づけた。具体的には、1850年代の別段風説書の情報全体を概観し、特に1848年革命以後の政治情勢、自由貿易をめぐる情報、科学技術の発展に関する情報を確認した。またヨーロッパ最大の事件であるクリミア戦争に関する情報について1853年～1856年の別段風説書を検討し、その戦争の広がりが正確に伝わっていたことを明らかにした。最後に今後の課題として別段風説書のオランダ語原文の作成者についての研究、翻訳者である通詞の研究、歴史的事象や概念に関する現在の理解への問い直し、の三点をあげている。このほか、東洋史・西洋史などの外国史研究者を招いて、特別研究会・シンポジウムを開催し、外国史の立場から貴重な報告・コメントを得た。

以上が主な研究成果であるが、今後の展望としては、以下の三点をあげておきたい。

「別段風説書」の写本類はいまだに未発見ものが多く存在する。特に編纂された雑記・見聞記など、表題をみただけではわからないものの中に、写しが残っている場合も多い。引き続き所在調査を行い、史料学的検討が必要となる。

幕閣や、諸藩、幕臣、学者など、国内における情報網が少しずつ見え始めている。なかでも津山藩儒者箕作阮甫、仙台藩儒者大槻磐溪、幕府儒者塩谷宕陰などがキー・パーソンであることは間違いなく、今後さらに検討が必要である。また昌平坂学問所や和学講談所に関する学者同志の交流とネットワークによって豪農や豪商など在地社会へも情報が広がっていく動きも見てきたが、いまだに不明な点が多く、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

「別段風説書」の翻訳とその内容について、オランダ語原文とオランダ通詞による和解の比較検討、現代における日本語への翻訳の問題などを含め、日本史以外の外国史研究者の視点での研究・評価がさらに必要である。外国史研究者の参加による「別段風説書」の世界史的な位置づけ、情報の評価が不可欠となるだろう。

引用文献

研究代表者青山学院大学岩田みゆき『「オランダ別段風説書」の研究(研究課題番号20H01314:令和2年～令和4年度科学研究費補助金基盤研究B(一般)研究成果報告書)』令和5年3月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 岩田みゆき	4. 巻 39
2. 論文標題 幕末期における長崎貿易商人の海外情報－巨智部忠陽長崎在番日記『要録』の検討－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22001	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本英治	4. 巻 39
2. 論文標題 書評 風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22003	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本英治	4. 巻 2
2. 論文標題 中国の開港と日本の開国の授業展開案－日本の「開国」の学習を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山川歴史PRESS	6. 最初と最後の頁 8-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩下哲典	4. 巻 46
2. 論文標題 静岡県藤枝市岡部町の松岡神社史料について（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩下哲典	4. 巻 831
2. 論文標題 『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』－情報はなぜ活かされなかったのか！？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 先見経済	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩田みゆき	4. 巻 41
2. 論文標題 幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係－在地社会における別段風説書をめぐる情報環境－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 181-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 割田聖史	4. 巻 41
2. 論文標題 オランダ別段風説書における1850年代のヨーロッパ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 93-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩下哲典	4. 巻 41
2. 論文標題 「ペリー来航予告情報」と薩摩藩－別段風説書と藩主斉彬・弟久光、家老・長崎聞役、藩外協力者箕作阮甫など－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 161-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嶋村元宏	4. 巻 41
2. 論文標題 別段風説書の中の戦争と平和	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 117-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆一	4. 巻 41
2. 論文標題 アヘン戦争情報と塩谷宕陰「通商利害論」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 143-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本英治	4. 巻 41
2. 論文標題 別段風説書の取り扱いと翻訳作業－長崎訳の場合－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山史学	6. 最初と最後の頁 129-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本英治	4. 巻 30
2. 論文標題 別段風説書の取り扱いと翻訳作業－江戸訳の場合－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一滴	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩下哲典	4. 巻 47
2. 論文標題 静岡県藤枝市岡部町の松岡神社史料について(三)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 67-130
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩下哲典	4. 巻 48
2. 論文標題 静岡県藤枝市岡部町の松岡神社史料について(四)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 67-189
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嶋村元宏	4. 巻 49
2. 論文標題 幕末期における外国使節への接遇とまなざし: アメリカペリー使節とハリス使節を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神奈川県立博物館研究報告-人文科学-	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嶋村元宏	4. 巻 48
2. 論文標題 仙台藩儒・大槻磐溪によるペリー来航前後の情報とその活用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神奈川県立博物館研究報告-人文科学-	6. 最初と最後の頁 19-46
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本英治
2. 発表標題 洋学と漂流・漂流記
3. 学会等名 日本海事史学会第10回Web 例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本語版：岩下哲典 英語版：アナ リネア・カラデル 共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 右文書院	5. 総ページ数 224
3. 書名 ロシア海軍少尉 ゴローウニン事件 ムールの苦悩	

1. 著者名 岩下哲典	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 426
3. 書名 「文明開化」江戸の残像 一六一五～一九〇七	

1. 著者名 岩下哲典・藤村泰夫 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 見る・知る・考える明治日本の産業革命遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	割田 聖史 (warita satoshi) (20438568)	青山学院大学・文学部・教授 (32601)	
研究分担者	岩下 哲典 (iwashita tetunori) (30296230)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	
研究分担者	嶋村 元宏 (shimamura motohiro) (40261193)	神奈川県立歴史博物館・学芸部・主任学芸員 (82702)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	片桐 一男 (katagiri kazuo)	青山学院大学・名誉教授	
研究協力者	佐藤 隆一 (sato ryuichi)		
研究協力者	松本 英治 (matumoto eiji)	開成中学校・高等学校・教諭	
研究協力者	白石 広子 (shiraishi hiroko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------